

46 石黒忠憲と野口英世

— 石黒不円文庫調査第一報

町¹⁾ 泉寿郎・小曾戸 洋

I 石黒忠憲(一八四五〜一九四二)略伝

名は忠憲、別号は況齋・不円・鳥聞山荘。江戸で蘭方を学び医学所入学。維新後、大学東校少助教。大木喬任文部卿と合わず兵部省転出(七二)、軍医制度創設に携る。陸軍軍医総監。医務局長(九〇〜九八)。日清戦争軍功により男爵(九五)。日本赤十字社長(二七〜二〇)。子爵(二〇)。嗣子忠篤(一八八四〜一九六〇)は農商務省官僚・農相。

II 石黒家伝資料(不円文庫)の概要

蔵書・原稿は武見太郎仲介により慶大に寄贈されて現存。それ以外の文書類は今も忠憲の曾孫が管理されている。従来本資料の利用度は低いが、軍部・医界に重きをなした忠憲ならではの医史料に富み、かつ茶道を通じて

巨大な人脈を築いた人物だけに文化史的にも貴重である。資料は日記と来簡に大別され、忠憲日記は明治二十年の衛生制度調査の為の滞独日記から昭和十一年(九二歳)まで五十年に及ぶ。忠憲宛来簡は約二千通に上る。

III 石黒忠憲と野口英世

石黒と野口の交流は、伝研助手時代の野口が米医学者フレキシナーの通訳をした際、所見を聴取された時に始まり(一八九九)、野口帰国時の叙勲も石黒の尽力とされる(奥村鶴吉『野口英世』岩波書店 一九三三)。不円文庫の忠憲宛野口書簡は三通、うち二通が『野口英世書簡集1』(一九八九 野口英世記念会、野口書簡二五・来簡一四八収録)未収。既収一通は大正七年六〜十一月のエクスアドル調査で(今日誤認とされる)黄熱病病原体発見を報じた書簡だが、大正八年四月廿八日付の原資料に対し、『書簡集』では同年七月とあり誤脱も多い。

IV 新出の野口英世書簡の紹介(摘録)

大正四年十一月廿九日付「冠省」次二小生過般帰省の節は一方ならぬ御厚遇を辱ふし小生一身の光栄此上もなく奉感謝候。殊ニ出発の際は態々御見送被下実ニ感激

筆紙二述へ難く候。(中略) 小生海上無事一昨廿七日当地ニ着直ちに研究所ニ出勤再び研究に着手致候間乍他事御放慮被成下度奉懇願候。御笑草までに小生の書き散らしたる別刷の手許にあるものを取まとめ閣下まで捧呈仕候。(中略) 小生今後最終の目的は兎に角二三真正の価値ある業績を挙げ度事ニ候。今迄の分は御存知の如くほんの序幕ニ有之しのみニ候。(後略)。

大正六年八月十九日付〔冠省〕降而小生儀過般罹病の際には御多忙の御尊体なるにも拘らず態々御見舞状を賜り小生の榮譽無此上こと、遙かニ奉鳴謝候。(中略) 其準備として従軍を許され軍籍ニ入りし医師等ハ多少の時日間各所ニ開きある軍医短期講習会ニ入り最近の医学上の知識を吸収しそれから実地軍隊的の訓練を三ヶ月受けたる後愈々渡欧すること、聞及び候。ロッケフェラー医学研究所ニては陸軍省軍医部長(ゴルガス少将)と交渉の上短期の講習会を開き一回二十名宛養成致し居り候。其講習期ハ四週間ニして其課目は茲ニ封入御覧ニ入れ候通ニ御座候。但し小生の受持の課は小生病氣の為一時代講者ニ任じ置き候。(中略) 偕而斯かる境遇ニ介在

する小生なども出来るなれば日本人として(米国の市民権なき故然らざるを得ず候) 日本の赤十字と何かの連絡を付け兎に角此の大戦の一部に加はりし印しを得ば此上なき事と存じ申候。實際ニ於ては既ニ従軍せしと同様の役目を担当しつゝある事ニ候。就而は男爵閣下御在任を幸いとし小生へ何か日本赤十字社と關係を付け日本を代表する様のこと出来ざるものニ候哉。(中略) 当研究所正員の一人なる有名なる実験外科医アレキシス・カレル氏は：腐敗創即ち既ニ瓦斯菌其他の侵入ニて腐敗を始めたる創傷の治療ニ対し一新創意を出だし且つ実地ニ完成せしことハ多分閣下も御聞入れの事と信じ候。此の人は目下ロッケフェラー研究所ニ帰り模範病院(可移転的野戦病院)を所の正面なる空地ニ設置し右治療法を講習中に御座候。先達陸軍々医正小林幹氏一寸立寄り見物せられ候。(後略)。

※本稿は文科省科研費・特定A(2)「江戸のモノづくり」研究の一環である。

(1) 二松学舎大学

(2) 北里研究所東洋医学総合研究所